

稲刈り後は早期排水対策の徹底を！ 播種前には施肥設計の点検を！

1. 排水対策で収量・品質UP！

麦作にとって、排水対策は最も重要な技術です。播種時の土壌水分を低くすることで、①播種・出芽の精度向上、②除草剤の効果安定、③麦の生育改善や収量・品質の向上が期待できます。

2. 溝掘いをいち早く行い、水田を乾かしましょう！

稲刈りが終わったほ場から、順次溝掘りを行いましょよう。播種時期を見据え、10月上旬までを目途に作業を行います。

ただし、ほ場表面の滞水が目立つ場合、無理に機械作業を行うとほ場が荒れるため、まずは中干し溝等を利用して表面滞水の解消を促しましょう。

特に本年は、曇雨天が続いた影響で水稻の収穫時期が例年よりも遅くなっており、麦の播種時期まで十分な時間が取れない恐れがあります。稲刈りが終わったほ場は、乾くタイミングを逃さずすぐに排水溝を設置し、スムーズに播種が行えるよう準備を進めましょう。

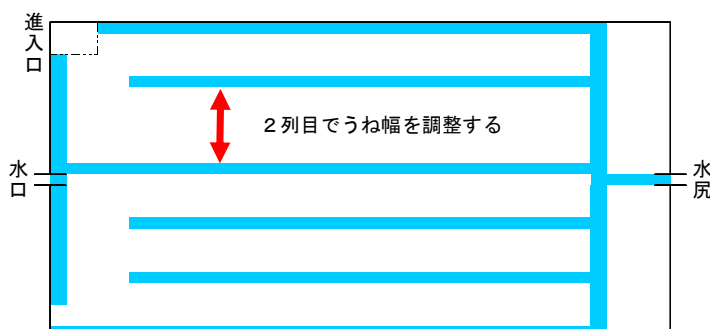


オーガ式溝掘機等で
しっかりした排水溝を作る

3. 排水溝(明きょ)は水尻まで流れるように！

①溝のつなぎ目は連結する、②水尻に向かって深くする等で、水口から水尻までスムーズに排水されるようにしましょう。暗きょ排水と補助暗きょや心土破碎を組み合わせた排水も効果的です。

一般的な優良施工事例



排水溝は尻水戸にしっかりつなぐ！
(溝の深さは15cm以上)

4. 施肥量に過不足がないよう、施肥設計を点検！

施肥量は栽培暦を参考に、地域や播種時期にあわせて設計しましょう。特に、全量基肥体系の場合、施肥量の過不足が収量や品質に大きく影響します。施肥設計に間違いがないか、改めて確認しましょう。

▲▲ご注意ください▲▲

令和4年産「ファイバースノウ」のほ場で倒伏や遅れ穂が発生！

【発生したほ場での栽培管理の一例】

基準より多い全量基肥肥料
+
穂肥や実肥を施用



播種遅れ、播種量の過度な増量
(細かい分けつが主体)
+
基準の全量基肥肥料と実肥



播種遅れ、通常の播種量
(分けつ不足)
+
基準の全量基肥肥料と実肥



これまでと同様の施肥管理を行った場合でも、冬期の積雪や低温などの気象要因により大麦の生育や肥料の溶出に影響が生じ、倒伏や遅れ穂が発生することがあります。 極端な多肥栽培を避け、状況に応じて穂肥や実肥を省略するなど、リスクを回避するための施肥設計を心がけましょう。